

ロマンス諸語における冠詞のカテゴリー化に関する対照的考察

藤田 健

Contrastive Study on the Categorization of Articles in Romance Languages

Takeshi FUJITA

要旨 : Though all the Romance languages have the category of article, their article systems are not always similar and the traditional grammar of each language has developed its own categorization of articles which are used in the language. Observing the articles of several Romance languages contrastively, we see that different categorizations from a language to another are applied to similar article systems, which seems to be linguistically quite inappropriate.

In this article we try to present an adequate categorization of articles in French, Italian, Spanish, Portuguese and Romanian from the point of view of Romance contrastive linguistics. We propose (a) that the so-called indefinite article and partitive article in French and Italian, which are traditionally considered to belong to separate groups, are integrated into a group which we call the indefinite article, which consists of two subgroups, indefinite singular article and indefinite partitive article, (b) that the so-called plural form of the indefinite article in Spanish and Portuguese should be categorized as an indefinite adjective and (c) that the categorization of articles in Romanian traditional grammar, which says that Romanian has only the genitive/dative form of the plural indefinite article and not the nominative/accusative form, is essentially appropriate.

キーワード : articles Romance languages contrastive linguistics

1. 序論

言語を科学的手法に基づいて研究する言語学には、その目的により音韻論・統語論といったいくつかの下位分野と、理論研究や記述研究といった種々の方法論が存在する。その中で、どの下位分野における研究にせよ、単一の言語を対象として特

定の現象を分析する研究と、複数の言語を対象として同一・類似の現象もしくは異なった現象を比較対照して分析する研究という二つの方法論が存在する。

後者の方法論は一般に対照言語学と呼ばれるが、近年対照言語学的分析が飛躍的に発展し、様々な分野において大きな成果をあげている。一つの例を挙げると、理論言語学において大きな役割を果たしている生成文法において、初期の段階では英語の現象を中心とした考察によって理論が構築される傾向があったが、英語以外のインド・ヨーロッパ語族に属する言語や英語と全く系統関係がない日本語や中国語との対照研究が進められることによって様々な事実が明らかになり、理論自体の精密化・簡素化が可能となっている。対照言語学的手法が用いられなければ、現在生成文法において展開されている最小主義プログラムの誕生は望むべくもなかったと言っても過言ではない。

対照言語学的手法は、単なる複数言語の比較にとどまらず、単一言語のみを対象とした研究では発見できない個々の言語の特徴を明示化することも可能とし、理論言語学に限らず、個別言語の文法記述にも大いに貢献するものである。

翻って、個々の言語におけるいわゆる伝統文法を複数の言語に渡って観察してみると、同様もしくは類似の現象であってもカテゴリー化が異なるという不自然な状況が観察されることが少なくない。一つの例として、ロマンス諸語における法・時制体系のカテゴリー化が挙げられる。英語の仮定法に相当する、非現実の仮定や婉曲的な願望表現に用いられる形態素は、フランス語・イタリア語・ルーマニア語においては条件法という独立した法としてカテゴリー化されるのに対し、スペイン語・ポルトガル語においては直説法の一部に分類され、過去未来形として現在・過去といった時制と対立する要素としてカテゴリー化されている。

このような事態が存在するのは、個々の言語の現象を記述する際に、他言語の現象を考察せず、その言語内で自己完結するような文法構築を目指しているためであろう。このような文法は、その言語を母語とする人々に規範を与えるという意味においては有益であろうが、その言語を母語としない人々にその言語を学ぶ手段を与えるというもう一つの文法の意義を考慮する時、極めて問題であると言えよう。

このような問題は、ロマンス諸語における冠詞についても観察される。それぞれの言語の伝統文法において、異なった冠詞の体系化がなされているが、各言語において冠詞の機能がそれほど異なるわけではない。本稿は、それぞれの言語における冠詞の基本的機能の共通性と名詞句に関する統語的特性の違いをもとに、通言語的により妥当な(いわゆる)冠詞のカテゴリー化を提示することが目的である。

2. ロマンス諸語における冠詞

2.1. ロマンス諸語とは

本稿が考察対象とするロマンス諸語とは、東はインドから西はヨーロッパまで、極めて広い範囲に分布するインド・ヨーロッパ語族の一グループで、古代ローマの

領土において民衆の間で話されていた俗ラテン語を起源とする言語グループである¹。代表的な言語として、フランス語、オック語（以上ガロ・ロマンス語系）、イタリア語（イタロ・ロマンス語系）、サルディニア語、ロマンシュ語（レト・ロマンス語系）、スペイン語、カタルーニャ語、ポルトガル語（以上イベロ・ロマンス語系）、ルーマニア語（バルカン・ロマンス語系）等が挙げられる。

これらの言語は、それぞれの言語の地理的な環境により、それぞれ独自の固有の特徴を持っている。例えば、フランス語は、隣接するゲルマン諸語との接触により、他のロマンス諸語に比べて語順がある程度固定化されているという特徴を有している。また、ルーマニア語はバルカン半島に位置し、他のロマンス諸語と地理的に隔離されているという環境にあるため、後置定冠詞、名詞の性における中性の保持、名詞における主格・対格 属格・与格の形態上の対立、接続法の節による不定詞節の代替用法の普及等の他のロマンス諸語には決して観察されない諸特徴を近隣の諸言語と共有している²。スペイン語においては、有生の直接目的語は無標ではなく、間接目的語を標示する前置詞がマーカーとして用いられる。ポルトガル語においては、不定詞であるにも関わらず主語と人称・数に関して一致する人称不定詞が存在する。

このようにそれぞれかなり異なった特徴を有すると同時に、ロマンス諸語において形態・統語的に極めて多くの特徴を共有しているのも事実である。語彙に関する形態的な類似性の他に、形態・統語的共通点として、動詞の法・時制体系、目的語代名詞クリティックの存在、不定冠詞・定冠詞の区別等多くの特徴が挙げられる。

次節では、本稿が対象とするフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語における伝統文法において、それぞれの言語の冠詞がどのように分類されてきたかを概観する。

2.2. 伝統文法における冠詞の分類

フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語には定冠詞・不定冠詞の区別が存在するという点で共通している。しかし、部分冠詞というカテゴリーが存在するか否かによって、冠詞の体系についてこれらの言語を二つに分けることができる。以下では、部分冠詞というカテゴリーが存在するフランス語・イタリア語と、このカテゴリーが存在しないスペイン語・ポルトガル語・ルーマニア語に分け、それあおれの言語における伝統文法による冠詞の分類を見ていく。

2.2.1. フランス語・イタリア語

フランス語とイタリア語は、定冠詞・不定冠詞に加えて、部分冠詞というカテゴリーが存在する点で共通している。部分冠詞とは、名詞句の指示対象を不特定の

¹ これらの言語にラテン語を加えてイタリック語派と分類されることもあるが、古典ラテン語及び俗ラテン語を含めずにロマンス諸語とする分類も一般的であるので、本稿ではこの用語を採用することにする。

² このような現象は、バルカン言語連合として知られている。このような特徴に関して、ルーマニア語が特に深い関係を有するのは、インド・ヨーロッパ語族スラヴ語派に属するブルガリア語である。

部の要素に限定する機能を持つ要素である。このような共通性を持つ両言語であるが、それぞれの伝統文法間で冠詞の分類法は一致しない。

フランス語の伝統文法においては、部分冠詞は数えられない対象の不特定の一部の要素を指示対象とする機能を有する語として分類され、数えられる対象の不特定の（複数の）一部の要素を指示対象とする機能を持つ語は不定冠詞複数形として、英語等においても見られる単数形のいわゆる不定冠詞と同じカテゴリーとして分類されている³。以下に、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の形式を示す。

定冠詞	単数	le (子音で始まる男性名詞) la (子音で始まる女性名詞) l' (母音で始まる名詞)
	複数	les
不定冠詞	単数	un (男性名詞) une (女性名詞)
	複数	des
部分冠詞		du (子音で始まる男性名詞) de la (子音で始まる女性名詞) de l' (母音で始まる名詞)

これに対して、イタリア語の伝統文法においては、フランス語において不定冠詞複数形として扱われている語は、部分冠詞複数形として部分冠詞に分類されている。

定冠詞	単数	il (大多数の子音で始まる男性名詞) lo (ある少数の子音で始まる男性名詞) la (子音で始まる女性名詞) l' (母音で始まる名詞)
	複数	i (大多数の子音で始まる男性名詞) gli (母音あるいはある少数の子音で始まる男性名詞) le (女性名詞)
不定冠詞	単数	un (母音及び大多数の子音で始まる男性名詞) uno (ある少数の子音で始まる男性名詞) una (子音で始まる女性名詞) un' (母音で始まる女性名詞)
部分冠詞	単数	del (大多数の子音で始まる男性名詞) dello (ある少数の子音で始まる男性名詞) della (子音で始まる女性名詞)

³ フランス語においては、英語のように加算名詞・不加算名詞という名詞カテゴリーの対立がはっきりと存在するわけではなく、同じ名詞でも部分冠詞がつく場合と不定冠詞がつく場合で指示対象が異なることもある。

dell' (母音で始まる名詞)
 複数 dei (大多数の子音で始まる男性名詞)
 degli (母音あるいはある少数の子音で始まる男性名詞)
 delle (女性名詞)

つまり、イタリア語においては数えられるか数えられないかという区別よりも、不定の数・量の要素を指示対象とするという機能を分類の基準とし、最小単位である1つの要素を指示対象とする機能をもつ不定冠詞と区別しているのである。

このように、機能としては同一である要素が、フランス語の伝統文法においては不定冠詞複数形、イタリア語の伝統文法においては部分冠詞複数形としてそれぞれ分類され、異なったカテゴリー化がなされている。これは、言語学的に見て妥当なカテゴリー化であるとは言えず、両者の共通性が捉えられるような形で定式化を行うべきであろう。

2.2.2. スペイン語・ポルトガル語・ルーマニア語

スペイン語・ポルトガル語・ルーマニア語においては、フランス語・イタリア語において見られる部分冠詞が存在せず、定冠詞・不定冠詞の対立のみが見られる。英語やドイツ語における冠詞の体系と異なるのは、いずれの言語でも不定冠詞複数形が伝統文法において認められている点である。これら3言語における伝統文法の冠詞の分類は、以下に示されるように共通している。なお、ルーマニア語はロマンス諸語では珍しく名詞句の格による形態変化を保存しており、冠詞の体系もそれに従う。

スペイン語

定冠詞	単数	el(大部分の男性名詞)	la(女性名詞及び少数の男性名詞)
	複数	los(男性名詞)	las(女性名詞)
不定冠詞	単数	un(男性名詞)	una(女性名詞)
	複数	unos(男性名詞)	unas(女性名詞)

ポルトガル語

定冠詞	単数	o(男性名詞)	a(女性名詞)
	複数	os(男性名詞)	as(女性名詞)
不定冠詞	単数	um(男性名詞)	uma(女性名詞)
	複数	uns(男性名詞)	umas(女性名詞)

ルーマニア語

定冠詞	主格・対格	
	単数	-ul(子音で終わる男性及び中性名詞)

-le (一部の母音で終わる男性名詞)
-l (一部の母音で終わる男性名詞及び母音で終わる中性名詞)
-ă -a, -ie -ia, -ea -eaua (女性名詞)

複数 -i (男性名詞)
-le (女性及び中性名詞)

属格・与格

単数 -ului (子音で終わる男性及び中性名詞)
-lui (一部の母音で終わる男性名詞)
-lui (一部の母音で終わる男性名詞及び母音で終わる中性名詞)
-i (女性名詞)

複数 -lor

不定冠詞 主格・対格

単数 un (男性及び中性名詞) o (女性名詞)

属格・与格

単数 unui (男性及び中性名詞) unei (女性名詞)

複数 unor

ルーマニア語は、属格・与格においてのみ不定冠詞複数形が存在するという点で、格による形態的な変化が存在しないスペイン語・ポルトガル語と異なっているが、それ以外の点においてはこれら3言語で伝統文法における分類に相違は見られない。

これら3言語の冠詞体系とフランス語・イタリア語の冠詞体系を対照的に観察した場合、言語学的に見て問題が生じることを後に見ていくことにする。

3. 冠詞の基本的な機能

本節では、上記5言語における冠詞体系の適切なカテゴリー化を考える上で、本稿がその基準とするそれぞれの冠詞の基本的な機能を見ていくことにする。従来一般的に伝統文法等において説明されている特定・不特定という概念に加えて、冠詞の適切なカテゴリー化のために本稿が重要であると考え、全体・部分という概念も考慮する。

3.1. 特定・不特定

伝統文法等において従来から指摘されている、特定・不特定という概念は、定冠詞と不定冠詞・部分冠詞の機能の対立に対応する。特定とは、言語的文脈、一般常識等によって、話し手が言及する名詞句の指示対象が何であるかを聞き手が情報として持っているということである。不特定とは、逆に、話し手が名詞句の指示対象が何であるかを知っていても、聞き手がそれを情報として持っていないということである。

定冠詞の機能は、それが限定する名詞句が特定であるということを示すことであり、不定冠詞の機能は、名詞句が不特定であることを表示することである。以

下に、各言語の定冠詞と不定冠詞の特定・不特定の典型的な機能を示す例を挙げる。
それぞれ a が特定を表す定冠詞、b が不特定を表す不定冠詞の例である。

フランス語

- (1) a. Je connais mal **les** parents de mon mari.
I know badly the parents of my husband
「私は夫の両親のことをよく知らない。」
- b. J'ai **une** sœur.
I have a sister
「私には姉（妹）がいる。」

イタリア語

- (2) a. Il professore è partito per l'Italia ieri.
the professor is left for the Italia yesterday
「先生は昨日イタリアに出発した。」
- b. È venuta **una** donna.
is come a lady
「ご婦人が一人やって来た。」

スペイン語

- (3) a. El viejo llevaba una gorra de piel.
the old-man wore a cap of fur
「その老人は毛皮の帽子をかぶっていた。」
- b. Tráeme **un** periodico de hoy.
bring-me a newspaper of today
「今日の新聞をどれか持ってきてくれ。」

ポルトガル語

- (4) a. Os meninos fecham **as** janelas.
the boys shut the windows
「その少年達は窓を閉める。」
- b. Compramos **uma** casa.
(we) buy a house
「我々は家を買う。」

ルーマニア語

(5) a. Doctorul dă banii unui prieten.

doctor-the-nom gives money-pl-the-acc a-dat friend

「その医者はそのお金を友達に与えた。」

b. Citesc o scrisoare de la un prieten.

(I) read a-acc letter from a-acc friend

「私は友達からきた手紙を読んでいる。」

定冠詞と不定冠詞・部分冠詞を分類する基準としては、この伝統的言及されている特定・不特定という基本的機能を基準とすることに問題はない。

3.2. 全体・部分

定冠詞と不定冠詞・部分冠詞の分類に関しては特定・不特定という概念が基準として妥当であることを見たが、不定冠詞・部分冠詞のカテゴリー化に関してはどのような機能が重要であろうか。

本稿では、全体・部分という概念がカテゴリー化において重要な役割を果たすと考える。名詞句の指示において、全体とは名詞句によって指示される集合の要素全てであり、部分とはその集合の要素の一部であると定義することができる。

一般に、名詞句の指示対象である集合の要素の中で、特定の一部もしくは要素全体を指す場合には定冠詞、集合の中で一部の不特定の要素を指す場合には不定冠詞・部分冠詞が用いられる。以下の a は定冠詞の全体指示の機能、b は不定冠詞複数形（イタリア語伝統文法においては部分冠詞複数形）の部分指示の機能をそれぞれ示している。フランス語・イタリア語においてはいわゆる部分冠詞が存在するので、c にその例も挙げる⁴。

フランス語

(6) a. Le chien est le meilleur ami de l'homme.

the dog is the best friend of the man

「犬は人間の最良の友である。」

b. J'ai rencontré des étudiants japonais sur le campus.

I have met some students Japanese on the campus.

「私はキャンパスで日本人学生に会った。」

c. Quand j'ai de la fièvre, je bois de l'eau.

When I have some fever I drink some water

「私は熱があるときは水を飲む。」

⁴ 定冠詞・不定冠詞単数形の部分指示機能については、前節の特定・不特定の機能における例が該当する。

イタリア語

- (7) a. **La** mela è una frutta.
the apple is a fruit
「りんごは果物である。」
- b. Davanti alla chiesa ci sono **dei** poveri.
In-front of-the church there are some beggars
「教会の前に乞食がいる。」
- c. Ho comprato **della** carne.
(I) have bought some meat
「私は肉を買った。」

スペイン語

- (8) a. **Los** hombres no son inmortales.
the men not are immortal
「人間は不死ではない。」
- b. Me han traído **unas** muertas.
(they) me have brought some samples
「彼らは見本を数個持ってきてくれた。」

ポルトガル語

- (9) a. **A** vida é breve.
the life is short
「生命は短い。」
- b. Havia **umas** flores em cima da mesa.
There-were some flowers on-the table
「テーブルの上に花がいくつかあった。」

ルーマニア語

- (10) a. Omul este un animal superior.
man-the-nom is a animal superior
「人間はより優れた動物である。」
- b. Vedem **niște** oameni în parc.
(we) see some men in park
「我々には公園に数人の人が見える。」

全体を表す機能、すなわち総称的機能を定冠詞が持っているのは極めて自然なことである。全体ということは、既に述べたように名詞句によって指示される集合の

要素全てを指示対象とするわけであるから、その対象は必然的に特定化されるものであり、聞き手にとって何の文脈を与えられなくとも指示対象が確定される性質のものである。従って、定冠詞が全体を指示する機能を有するのは、特定という本来の機能の一つの特殊事例に過ぎないのである。

4. 機能から見た冠詞の再分類

前節で概観した冠詞の基本的機能をもとに、本節では 5 言語における冠詞体系の統一的な視点からのカテゴリー化を試みる。まずは部分冠詞が存在するフランス語・イタリア語、次に他の 3 言語の冠詞体系について、それぞれの言語間の共通点、相違点に留意しながら考察を進めていく。

4.1. フランス語とイタリア語

2 節で見たように、極めて類似した冠詞体系を共有しているにも関わらず、フランス語とイタリア語の伝統文法においては、冠詞の分類方法が異なっている。この原因は何であろうか。

機能という観点から見ると、フランス語の伝統文法における不定冠詞と部分冠詞の分類というのは、単に加算であるか不加算であるかという観点での区別にすぎない。フランス語においてはそもそも加算名詞・不加算名詞という区別があまり意味をなさず、文脈によって同じ名詞が加算的にも不加算的にも用いられる。この用法の違いを言語的に標示するのが冠詞の機能の 1 つであり、加算的用法の名詞にはいわゆる不定冠詞が、不加算的用法の場合にはいわゆる部分冠詞がそれぞれ用いられる。従って、フランス語という個別言語の冠詞体系として、数の区別のある不定冠詞と、区別がなく単数形のみの部分冠詞という分類が合理的であると考えられているのかもしれない。

しかし、不特定の部分指示という点において、部分冠詞と不定冠詞複数形の機能は共通しているという、冠詞の機能という観点から極めて重要な点がこの分類においては捉えられていない。語源的に見ても、以下に示されるように、フランス語における不定冠詞複数形と部分冠詞は同一起源であり、この両者は同一のカテゴリーに属すると考えられるべきものである。

de + 定冠詞 = 部分冠詞、不定冠詞複数

加算・不加算という、指示機能という観点からはそれほど重要であるとは思われない基準に基づいて、これらを別の冠詞として区別することはあまり意味がない。むしろ、形式的にも語源が異なる不定冠詞単数形とそれ以外の不定を表す冠詞を区別するカテゴリー化がより妥当なものであろう。

そのもう 1 つの根拠として、両者には重要な相違点が存在する。不定冠詞単数形が主語として用いられる場合、全体を指示するいわゆる総称用法が可能であるのに

対して、それ以外の不定を表す冠詞にはそのような用法が存在しない。

(11) a. フランス語

Un homme peut-il être aussi cruel ?
a man can-he be so cruel
「人間とはそれほど残酷になれるものなのか。」

b. イタリア語

Un bambino non può capire una cosa simile.
a child not can understand a thing such
「子供にそんなことがわかるはずがない。」

c. スペイン語

Una mujer no puede hacerlo.
a woman not can do-it
「女性にそんなことは出来ない。」

d. ポルトガル語

Um político tem de ser honesto.
a politician has to be honest
「政治家というものは誠実であるべきである。」

e. ルーマニア語

Un hoț inteligent este întotdeauna liber.
a thief intelligent is always free
「賢い泥棒というのは常に自由だ。」

不定冠詞単数形が集合の全体指示を機能として持っているのは、その語源から考えて自然なことである。すなわち、これらの言語において不定冠詞単数形は、語源的に数詞の「1」を表す語から派生されたものである。「1」という概念は、集合において最小単位を構成するものであり、不定の数量に対応するものではない。任意の不定の最小単位の要素の指示操作を繰り返すことによって、集合要素全体の指示が結果的に成立し、全体指示という機能が果たされると考えられるのである。

これらの点を考慮すると、不定冠詞を単数形のみに限定し、複数形の形式を部分冠詞として分類しているイタリア語の伝統文法におけるカテゴリー化は、指示機能という観点から見て、フランス語の伝統文法におけるそれよりも優れていると言える。しかし、一方で、不定冠詞も部分冠詞も不定の名詞句を表すというもう1つの機能上の共通点を捉えることも必要である。イタリア語伝統文法における分類は、この点において不十分であると言わざるを得ない。

以上の考察をもとに、フランス語とイタリア語における、機能から見た冠詞の分類は以下のようなものが適切であろう。

フランス語		不定冠詞	
定冠詞		不定単数冠詞	不定部分冠詞
単数形	le, la, l'	un, une	単数形 du, de la, de l'
複数形	les		複数形 des

イタリア語		不定冠詞	⋮	不定形容詞
定冠詞		不定単数冠詞		不定部分冠詞
単数形	il, lo, la, l'	un, uno, una, un'		単数形 del, dello, della, dell'
複数形	i, gli, le			複数形 dei, degli, delle
			⋮	

両言語の体系は基本的に同一であると考えられるので、同じカテゴリー化がなされている⁵。定冠詞と不定冠詞・部分冠詞の区別は伝統文法のそれと全く同じであるが、不定冠詞及び部分冠詞について異なった分類を行っている。特定・不特定という機能上の対立軸を鮮明にするために、前者に対応するのが定冠詞、後者に対応するのが不定冠詞とし、伝統文法における部分冠詞もこの不定冠詞というカテゴリーに包摂する。更に、この不定冠詞というカテゴリー内で、集合の要素の最小単位を指示する機能を持つ不定単数冠詞と、集合の不定数・量の要素を指示する不定部分冠詞を分類する。

このようなカテゴリー化を行うことの利点は、従来の特定・不特定という対立に対応する分類のみならず、全体・部分というもう1つの重要な対立にも対応する分類がなされるということである。すなわち、定冠詞と不定単数冠詞は全体指示、部分指示のいずれの機能も有するのに対し、不定部分冠詞は部分指示の機能しか持たないのである。

4.2. スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語

スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語においては、部分冠詞は存在せず、定冠詞と不定冠詞のみである。これらの言語の伝統文法では、共通して定冠詞単数形・複数形、不定冠詞単数形・複数形という分類を行っている。

⁵ この表において、フランス語とイタリア語で、不定部分冠詞の扱いが若干異なっている。これは、イタリア語においては、フランス語と異なり、不定部分冠詞の生起が必ずしも義務的ではなく、無冠詞名詞句も用いられるため、不定部分冠詞は不定冠詞と数量を表す不定形容詞との中間的性質のものであると考えられるためである。冠詞とは、名詞句の指示対象を確定するために義務的な要素であると考えられるので、生起が随意的なイタリア語の不定部分冠詞は不定冠詞と不定形容詞のいずれの性質ももっていると言うことができよう。

しかし、不定冠詞単数形に複数語尾をつけたものであるスペイン語とポルトガル語の不定冠詞複数形は、形式的な関係はあるにせよ、単数形とはかなり機能が異なるものである。すなわち、不定冠詞単数形は不定の単数形加算名詞句と義務的に共起するのに対し、不定冠詞複数形は不定の複数形名詞句との共起が義務的ではなく、「いくつかの」といった名詞句の数量詞的限定を行う要素である。従って、両者が同一の冠詞にカテゴリー化されるという伝統文法における考え方は妥当なものとは言えない⁶。

ルーマニア語においては、事情が若干複雑である。既に述べたように、冠詞が格によって形態変化を行い、主格・対格と属格・与格で形式が異なる。不定冠詞については、属格・与格形のみ複数形が存在し、主格・対格形においては不定冠詞複数形が存在しない。属格・与格形における不定冠詞複数形に対応する要素として、*niște* が挙げられる。これは、「いくらか、いくつか」という数量的限定を行うもので、英語の *some* と同様、生起が義務的なものではない。不定冠詞単数形と形態的關係が見られないことから、ルーマニア語の伝統文法において *niște* は不定形容詞として分類される。

これに対して、属格・与格の不定冠詞複数形 *unor* は明らかに不定冠詞単数形と形態的に関係付けられる要素である。生起の義務性という観点からも、*niște* やスペイン語・ポルトガル語伝統文法における不定冠詞複数形とは異なり、この要素は不定の名詞句と義務的に共起する。

- (12) a. Succesul *(unor) cântăreți e considerabil.
Success-the ind.art.pl.gen. singers is considerable
「ある歌手達の成功はかなりのものである。」
- b. Eu dau cărți *(unor) studente.
I give books ind.art.pl.dat. students
「私は(女子)学生らに本を与える。」

従って、この要素は真に不定冠詞の複数形と捉えるべきものである⁷。

このような点を考慮すると、これら 3 言語における冠詞の構成は以下のように捉

⁶ 池上(1987)によると、ポルトガル語に関して同様の主張が Teyssier(1976)によってなされている。

⁷ ルーマニア語において、なぜ属格・与格形のみ不定冠詞複数形が存在するのかという疑問が生ずるが、これはルーマニア語の格標示の体系に起因するものである。格標示の形態が豊富な言語に見られるように、ルーマニア語においては属格・与格はもっぱら形態的格語尾で標示され、属格・与格を表す前置詞は特殊な場合を除き用いられない。更に、名詞・形容詞は一般に独自の格変化を行わず、冠詞によってその格を標示されるというシステムを持っている。多くの言語においてそうであるように、無標の複数形名詞句は主格・対格形として用いられることから、属格・対格形の複数形名詞句については、前置詞を用いるスペイン語・ポルトガル語と異なり、冠詞がその格標示機能を担わなければならないのである。従って、ルーマニア語における不定冠詞複数形の存在は、ルーマニア語がスペイン語・ポルトガル語と冠詞の体系において異なっているからではなく、ルーマニア語固有の格標示体系によって要請される方策であると考えられる。この点に関しては、5 節で触れる。

えるべきであろう。

	定冠詞		不定冠詞		不定形容詞
	単数	複数			
スペイン語	el, la	los, las	un, una		unos, unas
ポルトガル語	o, a	os, as	um, uma		uns, umas
ルーマニア語	-ul, -le, -l, -a -i, -le	-i, -le -lor	単数	複数	niște
			un, o unui, unei	unor	

このように見てみると、ルーマニア語の伝統文法における分類は、冠詞の指示・限定機能という言語学的観点から見て極めて妥当なものであるということが言える。

5. ロマンズ諸語における名詞句の統語的被限定度

以上のようにそれぞれのロマンス諸語間における冠詞体系を観察してみると、「定」対「不定」という基本的対立において共通性を有しているものの、部分という概念に対応する形式が冠詞体系の中に組み込まれているかどうかという点において差が見られることが分かる。本節では、この言語間における冠詞体系の相違に関して、それぞれの言語の名詞句に関する統語的特性という観点から理由を考察していきたい。

前節までの議論で明らかになったのは、フランス語とイタリア語において集合内の不定の部分をなす要素を指示する形式が冠詞として体系化されているのに対して、ルーマニア語では不定冠詞単数と複数の対立が属格・与格においてのみ存在するという体系化がなされているに過ぎず、スペイン語とポルトガル語に関しては不定の単数を表す形式しか存在しないという、各言語間の体系化における程度の相違である。このように見ると、「不定の部分」を指示する機能を冠詞において最も体系化しているのがフランス語・イタリア語で、中間的な程度を示すのがルーマニア語、最も低い程度を示すのがスペイン語・ポルトガル語であると言える。

この相違は、各言語において冠詞の生起がどの程度義務的であるかという問題と深く関わっている。冠詞の生起の義務性が高いということは、統語的観点から考えると、名詞が冠詞による限定なしに生起することが好まれない、すなわち名詞句が統語的に冠詞に限定される度合い（ここでは非限定度と呼ぶ）が高いことを意味する。

冠詞が存在する言語において、冠詞の機能とは何かということを考えてみると、

名詞によって指示される概念に属する集合の中で、発話内で生起する名詞句がどの要素を指示するかということを明示的に標示することであると言える。名詞句の統語的非限定度が高い言語においては、この冠詞の機能が高次に体系化されており、冠詞（もしくはそれに類似する機能を持つ要素）なしには、名詞句が具体的にどの要素を指示するかを決定できないということが言える。逆に、名詞句の統語的被限定度が低い言語においては、上記の冠詞の機能が限定化されていて、限定要素を伴わない名詞句がそれ自体で具体的な要素を指示することが可能となっているのである。

この両者の差が最も顕著に表れるのが「不定」である。この理由を、「定」の場合と対比して考えてみよう。定の要素を指示するには、文脈や発話者と対話者に共有された情報によってその要素が決定されることを発話者が対話者に対して明示する必要がある。本稿で観察した全ての言語において特定の要素を表す定冠詞が存在するのは、特定の要素を指示するという操作が、聞き手にとって何らかの標示がなければ困難であるという事実によるものと考えられる。

これに対して、不定の要素というのは名詞によって指示される概念の集合に属する要素の任意の対象を指示するのであるから、定の要素を指示する場合と異なり何らかの情報を与えられなければ指示対象を理解できないというものではない。従って、情報伝達の効率性という観点から捉えると、不定を表す冠詞の義務性は、定を表す冠詞のそれほど高くなくてもよいものなのである。このため、各言語間における名詞句の統語的被限定度の相違は、もっぱら不定名詞句に関して観察されるということになる。

以上の議論を踏まえて、本稿で分析した各言語における名詞句の被限定度を整理すると以下のようなになる。

フランス語 不定部分冠詞が義務的であり、無冠詞名詞句は有標。
名詞句被限定度が極めて高い。

イタリア語 フランス語ほど義務性が高くはないが、不定部分冠詞が存在する。
名詞句被限定度がある程度高い。

スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語
不定部分冠詞が存在せず、無冠詞名詞句は無標。
名詞句被限定度がそれ程高くない。

フランス語とイタリア語において名詞句被限定度に差を認めるのは、不定部分冠詞の義務性の差による。イタリア語においては、不定部分冠詞の生起が一般的ではあるが、義務的ではない点でフランス語と異なる。しかし、スペイン語等における

ロマンス諸語以外の冠詞をもつ英語等の言語に比し、スペイン語等の名詞句被限定度が高いということを示している。ロマンス諸語だけではなく、冠詞をもつ全ての言語を考慮の対象とするならば⁸、これら 3 言語の名詞句非限定度が低いとは言えず、中間に位置すると考えるのが妥当であろう。

6 . 結論

本稿では、ロマンス諸語に属する 5 言語を対象として、従来の各言語の伝統文法における冠詞のカテゴリー化を概観し、ロマンス語対照言語学の観点からその問題点を指摘した上で、これらの言語の冠詞体系のカテゴリー化において「定、不定」という一般的な視点に、「全体、部分」という視点を加えることによって、より妥当性の高いカテゴリー化が可能となることを示した。更に、このカテゴリー化をもとに、名詞句の被限定度という概念を導入し、各言語を対比することによって、これら 5 言語の名詞句のシンタックスにおける特性を明示化した。

それぞれの伝統文法における冠詞の扱い方を観察して分かるように、類似の現象が複数の言語に観察されるにも関わらず、当該言語のみを考察するという方法を取ることににより、それぞれの言語の文法においてカテゴリー化が異なるという奇妙な現象が生じることがある。このような問題は、ロマンス諸語において、時制・法の扱い方等の他の現象についても見られるものである。当該言語における法則性を明らかにし、母語話者以外の人々に対しても正しい言語運用のための道具を提示するのが文法の一つの役割であるとすれば、このような状況は望ましくないものと言えよう。

対照言語学という観点から、同様もしくは類似の現象を複数の言語にわたって観察し、言語間の共通点・相違点を明らかにすることによって、妥当性の高い分析を提示すると同時に、多くの人に理解可能な、より説得力のある個別言語の文法を構築することが可能となる。本稿では系統関係のある言語同士を対照的に分析したが、日本語と英語、日本語と中国語等まったく系統関係のない言語における類似現象の考察も、それぞれの言語の文法研究に対して多大な貢献をもたらすものである。

ロマンス諸語に限って研究の現状を見ると、それぞれの個別言語としての研究はかなり進んでいる言語もあるが、複数のロマンス諸語を視野に入れた研究は未だに少ないと言わざるを得ない。そのため、言語学的視点からの研究であっても、特定の一言語のみを観察しているために、伝統文法において述べられている内容の域を出ていないものも見られる。それぞれの言語の特性をより広く、深い視点で明らかにするためには、系統関係のない言語同士の対照研究と共に、ロマンス諸語間のような同系統に属する言語間の対照研究の必要性が今後さらに高まるであろう。

⁸ もちろん、日本語のような冠詞を全く有さない言語を考慮に入れることも可能である。その場合、冠詞のない言語はスケールの最右端に位置付けられることになる。また、ギリシャ語やブルガリア語のように定冠詞しか有さない言語は、英語よりも右側に位置付けられることになる。

参考文献

- Abreu, Maria Isabel and Cléa Rameh(1966), *Português Contemporâneo 1*, Georgetown University Press.
- Bon, Francisco Matte(1995), *Gramática Comunicativa del español*, Edelsa.
- Dardano, di Maurizio and Pietro Trifone(1997), *la Nuova Grammatica della lingua italiana*, Zanichelli.
- Deletant, Dennis(1995), *Colloquial Romanian*, Routledge.
- Freire-Nunes, Irène and José-Luis de Luna(1992), *Le Nouveau Portugais Sans Peine*, Assimil.
- Grégoire, Maïa et al.(1995), *Grammaire Progressive du Français*, CLE Internationale.
- Grevisse, Maurice(1993), *le bon usage*, Duculot.
- Guillermou, Alain(1953), *Manuel de Langue Roumaine*, Édition Klincksieck.
- Hutchinson, Amélia P. and Janet Lloyd(1996), *Portuguese An Essential Grammar* ,
Routledge.
- Iluțiu, Vincent(1989), *Le Roumain Sans Peine*, Assimil.
- 池上岑夫(1987), 「ポルトガル語文法の諸相」, 大学書林.
- 伊藤太吾(1990), 「スペイン語からルーマニア語へ」, 大学書林.
- 佐野泰彦(1962), 「基礎ポルトガル語」, 大学書林.
- 坂本鉄男(1979), 「現代イタリア語文法」, 白水社.
- 鈴木信吾, 鈴木エレナ(1999), 「エクस्प्रेसルーマニア語」, 白水社.
- 高橋正武(1967), 「新スペイン広文典」, 白水社.
- 富野幹雄(1989), 「スペイン語からポルトガル語へ」, 大学書林.
- 直野敦(1977), 「ルーマニア語の入門」, 白水社.
- 星誠(1961), 「ポルトガル語四週間」, 大学書林.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

Email： fujitat@let.hokidai.ac.jp

専門分野：理論言語学、ロマンス語学